

10) 沖曳網漁獲アユの生残率

酒井明久・澤田宣雄

【目的】活魚として利用される沖曳網漁獲アユは、サイズが小さいことや、底曳き漁法の特性から池入れ初期の歩留まりが低下するおそれがある。そこで、漁獲時期やサイズと池入れ初期の生残率を把握するための試験を行った。

【方法】表1に示した沖曳網漁獲アユについて、池入れ後7日目までの生残率を調べた。

表1 試験に用いた沖曳網漁獲アユ

漁獲日	場所	体重g (平均±標準偏差)	収容量kg (尾数)	密度kg/m ³ (尾数)
99/01/20	沖島沖	0.40±0.221	5.6 (14,000)	0.8 (2,000)
99/01/26	彦根沖	0.25±0.117	2.8 (11,200)	0.4 (1,600)
99/02/05	新海沖	0.41±0.377	4.0 (9,800)	0.6 (1,400)

供試魚は、漁獲後直ちに輸送し、水産試験場の屋内池(7m³)に収容した。輸送中及び池入れ時の飼育水は、0.7%の食塩水に調整し、約2日間で真水に戻した。その後は18℃の地下水で飼育した。収容後3日目から1~3%の給餌率で配合飼料を与えた。

【結果】漁獲アユの体重組成を図1に示した。1月26日の漁獲アユは0.4g未満のものが90%以上を占めたが、1月20日と2月5日の漁獲アユは、1.0g以上のものも含まれ、バラツキが大きかった。

池入れ後7日目までの生残率を図2に示した。生残率の変化は、3回の試験ともほぼ同様の傾向を示し、池入れ初期に低下し5日目以降は安定した。へい死の主な原因は、漁獲時の損傷と損傷が原因の水カビ病と考えられ、死魚から冷水病原菌は検出されなかった。

漁獲時の影響で死亡したと考えられる池入れ後3日間の生残率を表2に示した。3日間の生残率は70~80%であったが、これは過去の同様の試験と概ね同程度の結果であった。

表2 沖曳網漁獲アユの生残率の比較

漁獲日	平均体重(g)	生残率(%)	
		3日間	7日間
99/01/20	0.40	78.1	75.9
99/01/26	0.25	71.9	67.5
99/02/05	0.41	71.9	62.0
95/01/12	0.24	61.9	-
95/02/09	0.30	73.3	-
96/01/12	0.33	56.4	-
96/02/08	0.25	74.5	-

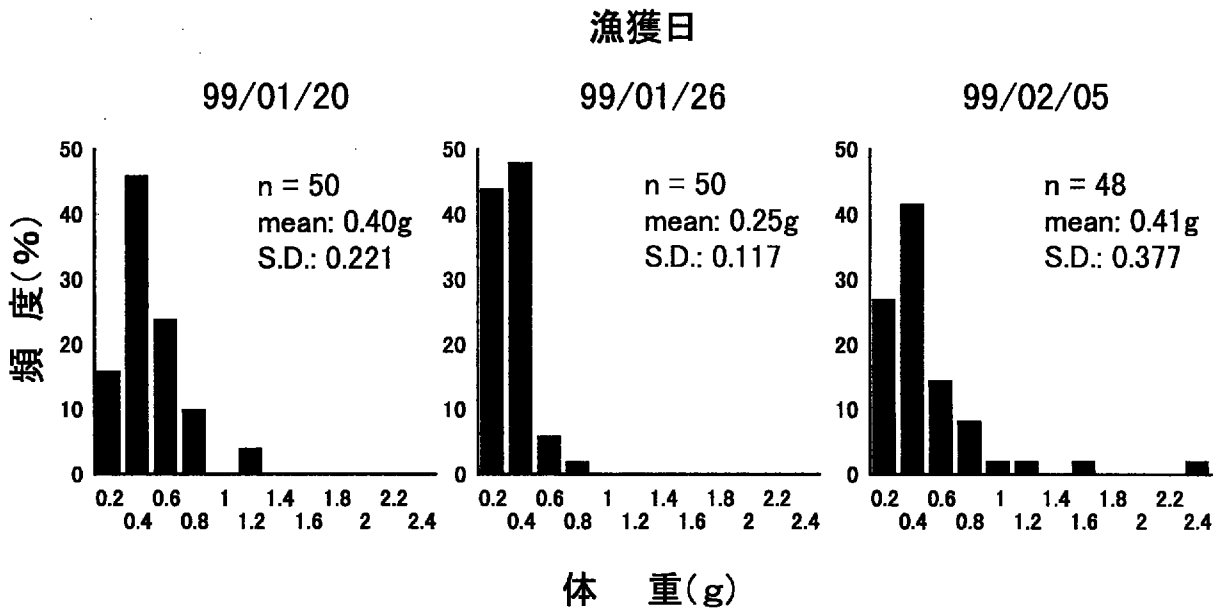


図1 沖曳網漁獲アユの体重組成.

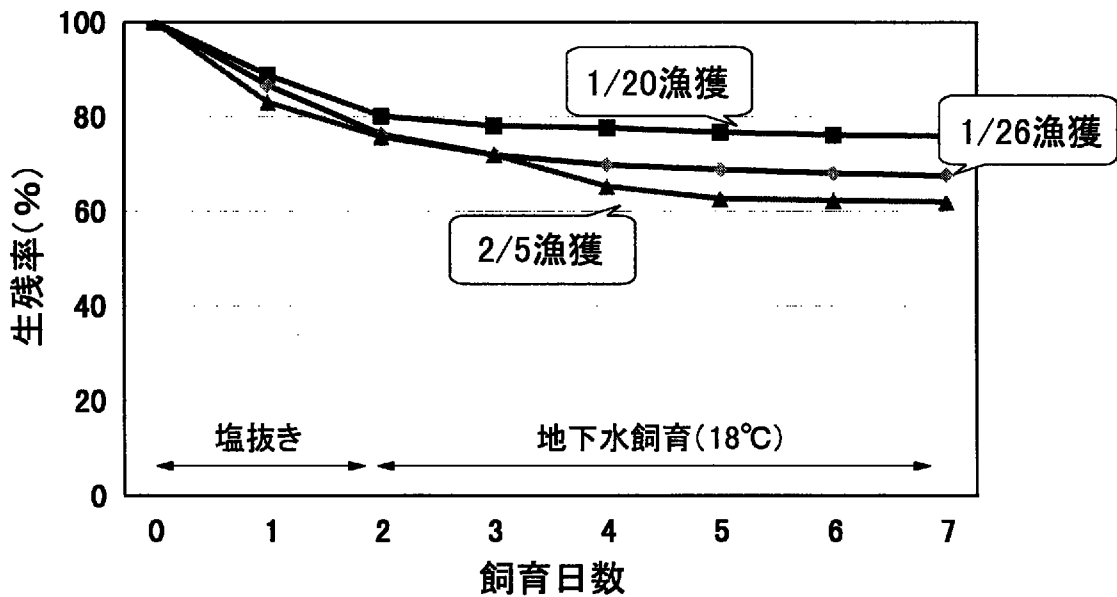


図2 沖曳網漁獲アユの生残率.